SGLT・レッスン
SGLT Lesson

SGLT2阻害薬服用の糖尿病患者の皮膚症状について

佐藤 伸一
Shinichi Sato
東京大学大学院医学系研究科皮膚科学 教授

はじめに

わが国では，6剤のsodium glucose co-transporter（SGLT2）阻害薬（イプラグリフロジン，カナグリフロジン，ダパグリフロジン，エンパグリフロジン，ルセオグリフロジン，トホグリフロジン）について，製造販売承認申請が行われ，2014年4月に発売されたイプラグリフロジンを皮切りに，相次いで発売された。イプラグリフロジンの発売以来，大きな期待を持って使用例が増加したが，予期せぬ副作用，特に薬疹が高頻度に出現したため，適正使用が強く推奨されるようになった。このような背景から，日本糖尿病学会の「SGLT2阻害薬の適正使用に関する委員会」より2014年8月29日にRecommendationの改訂版が発表された。この改訂版作成において，皮膚症状の評価に関わった者として，今回Recommendationの皮膚症状の記載に至った経緯について概説する。

SGLT2阻害薬による皮膚症状の頻度

本原稿執筆時点（2014年10月）では，皮膚症状は約900例が報告されており，最も頻度の高い副作用となっている。そのうち，重篤例は100例以上にのぼる。しかし，重篤か非重篤かの定義は，各製薬会社の独自の判断であり，一定の基準で判断されているわけではないことに留意する必要がある。例えば，イプラグリフロジンでは，おおよその基準として，ステロイド全身投与，強力ネオミノファーゲンCなどの何らかの点滴治療を行った例，あるいは皮疹が全身に及んでいる例などを重篤としているが，他社のSGLT2阻害薬では全身に皮疹が及んでいても，あるいはステロイドの全身投与を行っていても重篤と判断されていない場合もある。

SGLT2阻害薬の全副作用における皮膚症状の割合は，17～24%と報告されている。また，SGLT2阻害薬全使用例における薬疹の頻度は，約1%と推定されている。これは，抗炎症薬など広く使用されている薬剤における頻度（約0.2～0.3%）と比べると数倍高い値となっている。また，一般的に薬疹をきたしやすいとされる薬剤では，その頻度は1～4%といわれていることから，SGLT2阻害薬の薬疹の頻度はかなり高いものと考えられる。なお，これらの皮膚症状が特定のSGLT2阻害薬に多いのか，あるいはこのクラスの薬剤に共通の副作用であるのかについては，現時点では不明であり，今後注意深い観察が必要である。

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.